

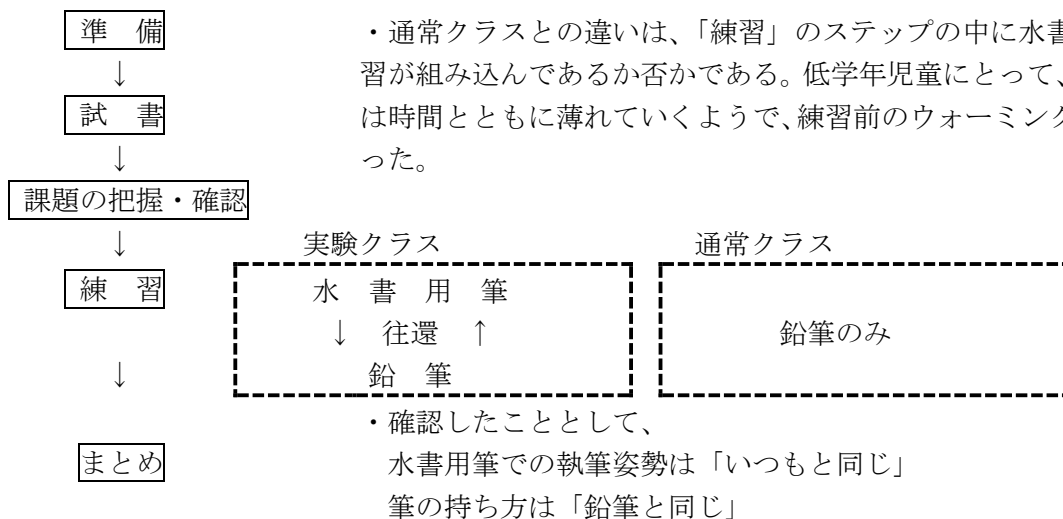
第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 01

学校名・団体名	札幌市立手稲山口小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	水書用筆でひらく、新しい硬筆書写の学習展開
<p>〈活動・研究の意義および活動報告〉</p> <p>1. 実施に至るまでの経緯</p> <p>新学習指導要領の内容が浸透し、教育現場で理解が進む中、新たに取り組むべきものや指導に工夫改善が必要なもの、また教師の力量を高めるために早急に研修等が必要なものなどが指摘されている。殊、国語科書写においては、低学年の硬筆指導に水書用筆（毛筆様のもの）等を使用した運筆指導を取り入れるなどの工夫が必要、との解説が出された。未だ『毛筆の書写学習』を小1からとの誤解が残っているが、では、低学年の水書用筆を使った学習とは、具体的にどのような展開なのか。硬筆による書写の能力の基礎を養うために、どう指導していくべきなのか。また、技能の向上を伴う書写学習の中で、「主体的・対話的で深い学び」をどう実現していくのかを少しでも良いから形にしたい、というのが本校の研究企画部の願いであった。</p> <p>2. 活動内容と時期</p> <p>① 水書用筆を用いた点画指導</p> <p>（当初、9月初旬に札幌で開催される予定だった、「水書用筆等を活用した書写の指導法指導者研修会」の受講後から研究を始めて行く計画だったが、北海道胆振東部地震発生のため中止となり、スタートがやや遅れた。→31. 1. 17に開催され、14名が受講。）</p> <p>●10月－11月（小1・小2 各2クラス／全8クラス中）</p> <p>水書用筆の導入。経験をさせる。筆の感触に慣れることに重点を置き、多くの時間を「筆に触る、持つ、線を書いてみる」体験に使った。2年生からは、絵筆（絵画セットに入っている筆）に似ているとの感想があがったが、穂先の形状や毛の弾力の違いに気付き、太細の調節が自在にできることに気付いた児童もいて、一定の効果があった。</p>	

当初「水入れ容器」は、紙コップを使用していたが、安定性や耐久性、コストの面から教具としては不向きであった。そこで、助成使途を再申請し認めていただき、専用容器を購入した。大きさや滑り止めの工夫などされており、とても使いやすい。

● 11月～ 実験クラス(水書用筆の学習を導入するクラス)と通常クラスに分け、書写学習を実施。以下の展開モデルを組み、学習を進めた。



● 12月 「文字フェスタ」開催 本校／3階体育館、900名観覧

手で文字を書くことへの関心を高め、文字を大切にしていける態度を養うために開催。札幌龍谷学園高等学校書道部のパフォーマンスとともに、児童代表が大筆による揮毫を体験。手書き文字の良さや価値を再確認するとともに、手で文字を書く大切さを感じた。観覧した保護者からは、「間近の迫力に感動した」「書写書道の概念が変わった」などの声が寄せられ、地元教育新聞でも紹介された＝写真。



3・効果と展望

水筆を用いた低学年の硬筆(運筆)指導には、学習した点画の特徴の一部を日常の文字に転化することができるようになるなど、一定の効果があった。また、普段味わえない毛筆の筆触にふれることが興味の湧く体験となり、低学年なりの課題解決への対話が多く見られた。書写学習全般への意欲にもつながった。

一方で、筆の扱いが自分の意のままに操れるようになるのは、低学年には至難の業であり、個人差もある。「慣れ」が必要であることと、「(文字の形に気をとられることなく)鉛筆(硬筆)と同じように書く」意識を徹底し、鉛筆(硬筆)で正しく書けるようになるための練習用具であることを意識づけていくことが重要であった。

今後はこの学習を、「いつ」、「どんな単元で」「どのくらいの時間を割いて」学習することが最も効果的なのか、また深い学びにどうつないでいくかを、経年でとらえ検証してみたい。

2つの大きな活動、学習により、手で文字を書くことの楽しさが実感でき、書写学習のみならず日常の中で文字を書く場面に意識が向くようになったことは非常に大きな成果であった。